

国立ゆかりの石彫家

せき びん

関 敏 作品

くにたちMAP

関 敏



これは
ボートでは
なくて



(公財)くにたち文化・スポーツ振興財団 発行

関 敏さんのこと

国立市内のあちこちに点在するたくさんの石のアート。じつはたった一人の作家の手によるものだと知っていますか。関敏氏。谷保に生まれ谷保で育った石彫(せきちょう)家です。



自宅アトリエにて(2017年)

機械が嫌いでひたすら自分の手で、しかも道具の(のみ)を一本一本、手づくりするところから石を彫り、仕上げもなるべく手で磨く。その独自の制作工程が生み出した作品は、「石なのに、なぜかあたたかい」といわれる不思議な存在感に満ちています。

ひとつひとつをじっくり見ていくと、関敏作品のユニークさ、そして作品が生まれるまでのたくさんの時間と情熱が、きっとあなたにも伝わるはず。

マップ片手に市内をひとめぐり、いかがですか。

篆刻による
敏さんのサイン



●輪舞(ロンド) ※関係者以外の鑑賞は許可が必要です
オーストラリア砂岩 1993年

創立90周年記念で造られた、184枚から成る全長18mの壮大なレリーフ。木目のような柔らかさを感じさせる砂岩を、わざわざ現地まで買付に行ったのだそう。

●Heart Strings-87
大理石 1987年



●襷(ひた) 黒御影石 1987年
インドを旅したときに見た石造物、その衣の美しさに触発された。地球のダイナミックな襷である山や谷、さらに西洋のピーナスと東洋の観音像のイメージもこめて。



●虚空 大理石 1977年
お釈迦様の足元を飾る蓮(ハス)は、煩惱の泥水の中から美しい悟りの花を咲かせる。本来は16枚だが、花びら一枚だけでも救われるのではと…。



●指月 赤御影石 2003年
月(仏)に向かって指差してはいるが、それは本当に指しているのか、その方向が正しいのか、たまに疑うことも大切だと…。



●ママ下湧水の碑 赤御影石 2003年
今でも湧水が湧き出る崖線下。敏さんが子どものころは、サウガニが棲みワサビ田もあった。

●永代供養塔 赤御影石・黒御影石 1998年



●弁才天像 インド黒御影石 1985年
学問と技芸のインドの神・弁才天は、インダス川を神格化したものとか。台座に水路を彫り「水の神」をも表した。
※境内では静かに鑑賞ください



●開校百周年庭園式岩石園 白御影石・大理石 1974年
国立市立第一小学校は敏さんの母校。いろいろな種類の石を並べた"学べるオブジェ"は後輩たちへの贈り物。
※関係者以外の鑑賞は許可が必要です



●地蔵尊像 白河石 1976年
谷保村の名士・本田家。その主屋や薬医門は国登録有形文化財になったが、庭の片隅に佇むお地蔵さんにもご注目。
※「文化財ウィーク」限定公開



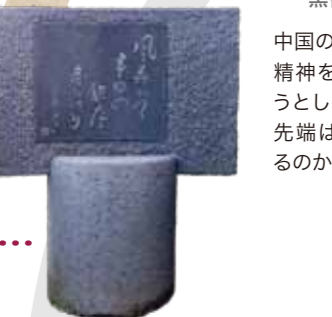
●座牛 黒御影石 1973年
この像にこめられた、敏さんのゆかいな企みは裏面です。



●山口瞳先生文学碑 本小松石 1997年
直木賞作家・山口瞳氏の功績をたたえて。



●原田重久先生句碑 黒御影石 1981年
国立の郷土史家原田重久氏が詠んだ句「風落ちて青田の秩序 戻りけり」。



●和魂漢才碑 黒御影石 1978年
中国の進んだ学問を日本の精神を失わずにとりいれようとした平安時代。割れた先端は「それは本当にできるのか」という疑問を呈す。



ここで会えます 関 敏 作品



●時計塔
ホルトガル花崗岩 1979年
トップは花の形の球体ですが、市の予算不足で四角になったとか。



●レリーフ味(わ)
インド砂岩 2003年
せきやピルのエレベーターホールに入って見上げるとそこには...!白い鳩が天にむかって飛び立っていく姿は圧巻です。



●形が山と口!



敏さんの「とっておき話」

たくさんの人に見てもらいたいから、「石」だった。

「藝大にはいった頃は、最初は彫塑からはいったのだけれど、僕はたくさんの人に作品を見てもらいたかった。できるだけ閉ざされた空間でなく、野外に、広いところに作品を置きたいと思ってね。ところが風雨に耐えるブロンズだと1体つくるのに100万円もかかる。そんなお金はないし、だから自然と石になった。でも当時は石を彫るひとなんていなかったから、師匠もなしですべて独学でした。」

機械が嫌いだから、ひたすら手で石を削ってきた。

石を彫るには、右手にハンマーを持って左手の鑿(のみ)をたたき、最初はひたすら原石を荒削りしていく。ときには重いハンマーをつかって3トンの原石の半分を削り取ることも。「初めて1キロのハンマーを手にするると重くて2、3週間は手に豆をつくるけれど、その状態を過ぎてしまえば、手も固まって楽に仕事ができる。だから誰でも最初はゆっくり手をならすことから始まります。まあ、2キロのハンマーで夢中になって1日10時間も彫り続けると、しまいに指がかたまってしまって、1本1本、柄からはずさなきゃならないこともあ



スペイン製のヘッドに野球の硬式バットを柄に利用した、敏さんオリジナルのハンマーと鑿。

たけどね(笑)」。しかも当時、鑿はすべて手づくりだった。コークスを燃やし、鉄をたたいて作品に合う鑿をつくる。ようやく50本の鑿をつくっても1日で20本つぶしたこともあったそう。機械を使わず、ひとのみ、ひとのみを大切に掘るから、ひとつの作品ができあがるまでには数か月もかかる。それが敏さんの仕事。

谷保天満宮の「座牛」は、触るためにある。

国立市内で最初に登場した敏さんの作品は、谷保天満宮の階段を降りたところにある『座牛』(アンデス産の黒御影石。1973年)。「菅原道真が亡くなったときに悲しみのあまり動かなくなった、という牛だから、僕は実際に牛をあちこちスケッチして観察し、梃子でも動かなくなった牛は鼻面を前に突出した姿勢だと思った。座牛の背筋は遠い山の峰に見立て、裾野には天神さんが見守る谷保の村落。そしてその鼻を台座から10センチ前を出して、お参りする人が誰でも触っていいようにしたんです」。そう、だから今、牛さんの鼻のアタマは敏さんの思い通りピカピカに。

石の材料を選ぶには、ひとつひとつ理由がある。

「野外に置くってことは、とがったものや人に危害を加える恐れがあるものはダメだし、天候や温度変化にも耐えるものでなくてはならない。だから置かれる場所や目的によって石の材料を選びます」例えば、先の座牛は風雨に耐える黒御影石だが、芸小ホールの前に置かれている2つの作品「虚空」の材料は、水を吸収しやすいイタリアの大理石。雨にぬれ続けると黒くなってしまいますので、屋根の下に置かれている。70年にわたり、さまざまな石と対話しながら、石を彫り続けてきた関敏さん。最近では旅のスケッチ画の個展も市内で開かれてきた。

小さな硯に篆刻(てんこく)、スケッチも。

敏さんは大きなものばかりではなく、同じく石を素材とした硯、鉄やブロンズの文鎮など、小さな文房具も制作している。さらに「篆刻」に興味をもち、中国には研鑽もかねて蘇州からタクラマカン砂漠の西まで10数回も旅をしたそう。



硯(2003年)

その中国やヨーロッパを旅した時の思い出は、たくさんスケッチになって、地元の展覧会を飾ってきた。そういえば「子どものとき、絵を描くのが好きだった」のが、石彫家としての原点でもあるらしい。

70年にわたる一人の芸術家の軌跡、作品を通してどうぞお楽しみください。



アトリエにて(2017年)

他にも個人蔵(非公開)含め50点以上の作品が国立にあります



●多摩川 日野の渡し碑
アフリカ黒御影石 1986年
(立川市錦町 市下水処理場わき)

川の対岸を、そして過去と現在をつなぐ“舟”に“月”をアレンジしたフォルム。自然と共に生きた先人たちへの敬意を込めて。黒御影石は風雨に強く、風化しにくい。

●水盤 御影石



●風花
ドイツ花崗岩 1995年
風化して、全てが化石のようになってしまったイメージ。一つの石材を削り、上部だけ5種類の砥石を使って手で磨いてつやを出した。(明窓浄机館所蔵。公開は不定期)



●虚空
稲田石 1972年
稲田石は、茨城県から産出する花崗岩。



●地蔵尊像
本小松石 1976年

●曲水 本小松石 1982年
遊び心満載な、L字形水路のオブジェ。周囲の草木に水を与える役割も兼ねている。本小松石は、神奈川県真鶴から産出する安山岩(火山岩の一種)。



●風紋
ドイツ花崗岩 1994年



●是從南甲州街道
真壁石 1993年



●馬頭観音
小松石 2002年



●鎌倉の海100周年記念碑「波動」
アフリカ黒御影石 1983年(鎌倉市 由比ヶ浜)

鎌倉の800年の年輪と波紋の襲を重ね、波のように拡がる未来への願いを込めた。中心部の穴は、太陽を吸収する円、風を感じる間。若宮大路の突き当りから200mほど西の海岸沿いにある。

●礎(いしずえ)
インド黒御影石 1980年
37年にわたりJR八王子駅前に置かれていたが移設中。新しい設置場所未定。



市外でも見られる関敏作品

●風紋
ドイツ御影石 1993年
(立川市 幸福社会館)

中国・新疆ウイグル自治区で見た、ダイナミックに変貌する砂丘の表情をイメージ。



●地蔵尊像
小松石 1992年(立川市 流泉寺)

頭部と宝珠だけを磨いてある。境内の五百羅漢の一体目も敏さんの作品とか。
※境内では静かにご鑑賞ください



関敏氏年表 1930~

- 1930 東京都国立市に生まれる
- 1951 東京藝術大学美術学部彫刻科 平柳田中教室彫塑に入学
- 1956 東京藝術大学 卒業
- 1957 彫刻3人展(江口遇・湯原和夫・関敏) 銀座ときわ画廊

- 1963~65,67 個展(日本橋 秋山画廊)
- 1967 「札幌建設の地」100周年記念碑「指月」制作
- 1968 霞ヶ関ビル35階東京会館 「水煙」(ブロンズ彫刻)制作
- 1972 個展(国立 谷保天満宮梅林)
- 1973 国立 谷保天満宮「座牛」制作
- 1974 個展(八王子 大丸)

- 1976 個展(立川 たましんギャラリー)
- 1977 第3回彫刻の森美術館大賞展
- 1978 国立 谷保天満宮「和魂漢才碑」制作
- 1979 国立駅南口ロータリー時計塔 制作/個展(福山 イマヰ画廊)
- 1980 第3回八王子国際彫刻シンポジウム参加
- 1981 国立 谷保天満宮「原田重久先生句碑」制作 個展(虎ノ門 愛宕山画廊)/個展(国立 画廊岳)

- 1982 立川 流泉寺「地藏尊」制作
- 1983 鎌倉の海100周年記念碑「波動」制作 個展(虎ノ門 愛宕山画廊)
- 1984 個展(国立 画廊岳)/関敏スケッチ展(小平 一ツ橋画廊)
- 1985 国立 南養寺「弁財天像」制作 7人による彫刻小品展(国立 画廊岳)

- 1987 くになち市民芸術小ホール「襲」制作 エソラ開廊記念展(国立 エソラギャラリー)
- 1989 関敏展(銀座 愛宕山画廊)
- 1990 関敏作品展(国立 画廊岳)
- 1991 関敏パステル画展(国立 ギャラリーエソラ) 関敏展一襲から裂へー(銀座 愛宕山画廊)
- 1992 関敏マケットと小品展(国立 画廊岳)
- 1993 立川市 幸福社会館「風紋」制作 東京女子体育大学「輪舞(Rond)」制作

- 1994 パリ島スケッチ展(国立 ギャラリーエソラ)
- 1994 関敏展一石彫・風紋一(銀座 愛宕山画廊)
- 1995 関敏ヨーロッパスケッチ展(国立 画廊岳) 関敏展(あきる野 綜藝舎ギャラリー) 描かれた国立=まち=人=自然=くになち郷土文化館開館1周年 特別展(くになち郷土文化館)
- 1997 国立 谷保天満宮「山口瞳先生文学碑」制作 関敏展(あきる野 綜藝舎ギャラリー) くにたち美術展(くになち郷土文化館) 関敏文具展(国立 ギャラリーコロ)

- 1998 関敏展一石に聴くー(国立 たましん歴史・美術館) 関敏文具展(国立 ギャラリーコロ)
- 1999 関敏展(国立 ギャラリーコロ)
- 2000 『石に聴く 石を彫る』(里文出版)出版
- 2001 関敏展(国立 ギャラリーコロ)
- 2003 関敏彫刻展(国立 画廊岳)
- 2004 絵と文具展(国立 ギャラリーコロ)
- 2006 関敏彫刻展(国立 画廊岳)
- 2007 関敏展(国立 ギャラリーコロ)
- 2009 硯と葉書絵展(国立 ギャラリーコロ)
- 2010 関敏展(国立 画廊岳)
- 2012 関敏展(国立 画廊岳) 関敏小品展一秋ー(国立 ギャラリーピブリア)

- 2013 関敏展「スケッチの想い出」(国立 画廊岳)
- 2017 関敏スケッチ展(国立 画廊岳)



まるまる 槐樹(えんじゆ) 1957年 (中野区 宝仙寺) 木彫の初期作品(非公開)



「関敏 石に聴く」 1998年 (たましん歴史・美術館) くになち中央図書館、郷土文化館資料室で閲覧可能。



「石に聴く 石を用る」 2000年(里文出版)

(このほか、展覧会多数)

国立市市制施行50周年記念 (公財)くになち文化・スポーツ振興財団設立30周年記念事業 2017年12月 第1版発行

[協力]株式会社 せきや [制作]国立歩記事業部(本誌のロゴは関敏氏制作)